

今月十八日午前九時。福島

県いわき市小名浜の綿畑は、厳しい冷え込みのため前日の雨を含んだ土が凍りついていました。そんな中、原発避難者向け仮設住宅や復興公営住宅、帰還を諦めて市内に再建した自宅などから、老若男女三十人ほどが集合時間を待ちかねたように集まってきまし

まだまだ

東北復興日記



▶▶▶ 206



特定非営利活動法人
ザ・ピープル理事長
吉田恵美子さん



その人らしく生き生きと

た。この日は今年初めての「みんなの畑」活動日＝写真。有機農法で茶色い和綿を育てる「ふくしまオーガニックコットンプロジェクト」も五年目のゴールが間近です。

避難者の方たちが地域のボランティアと一緒に栽培しているこの畑で、株の抜き取りのほか、畝を覆う黒いビニールの農業資材「マルチ」をはがす作業を行いました。

ゴボウ根を持つ綿の抜き取りは、女性でもそう難しくはありません。午前中に広い畑のほとんどで作業を終えることができました。しかし、土

を両端に載せたマルチをはがすには、凍った土を砕いて少しずつ巻き取るしかありません。軍手をはめた手が土からしみ出す冷たい水でぬれ、か

じかんでいきます。でも、参加者は楽しそう。笑い声を上げながら作業を進めています。昼食では、畑のオーナーが「畑の面倒をみてくれてありがとう」と餅をついて皆に振る舞い、正月気分を分かち合いました。

参加者の多くは富岡町からの避難者。近く、町は帰還困難区域を除いて避難指示を解除する予定です。しかし、そ

れが帰還を意味するわけではないことは明らかです。アンケートに「帰還する」と答えた町民は16%という結果もあります。

どこに住むことを選択しても、その人らしい生き生きとした暮らしが送れますようお願いしてやみません。この畑での農作業が、いわきでの暮らしを決断した方たちにとって、新しい生活のリズムを刻み出すために少しでも役立ってくれたら。春がきたら、皆でまた綿の種をまこうと思っています。

※この連載は、東京のNPO法人JKSKと、被災地の女性たちが協力して復興に取り組む「結核プロジェクト」の協力を得て、掲載しています。